

『異制庭訓往来』の制作法 『新撰遊覚往来』との重なりを中心に

三 保 サト子
(国文教室)

On the Characteristics of the Composition of *ISEI-TEIKIN-OURAI*

Satoko MIHO

はじめに

『異制庭訓往来』（『異庭』と略称）と『新撰遊覚往来』（『遊覚』と略称）とは多くの共通する語群を内包し、きわめて近い関係にある。一方で、『異庭』には『遊覚』では扱われなかった独自の題材も存在する。私は、この、ずれと重なりとを見ることによって、『異庭』を成立させた文化圏が、新興勢力の武家政権に近い場にあること、往来物を必要とする場が、寺院文化圏から武家文化圏へと移行していくことを立証したいと考えている。

本稿では、両者が重なり合う様相を中心にみるとし、「仏事」を題材とする11月往返状の場合を取上げた。『異庭』の引用は国会図書館蔵「百舌往来」（『訓点語研究』第五十輯所収の翻刻）に、『遊覚』については謙堂文庫本（『日本教科書大系』所収の翻刻）によるものとし、適宜他の伝本を参照する。

一 書名と伝本

本書については制作時の書名が明らかでない。古写本の状況は、次のようであって、表題に掲げた書名は版本のみのものであり、『庭訓往来』の流行にあ

やかる形でできた後代のさかしらと見るべきであろう。しかし、「百舌（鳥）」や「冷水」・「森月」とする理由も分明でない。むやみと饒舌な内容は、「百舌鳥」の名に相応しいようにも思うが、「新撰之消息」の名もあるので、暫く不明のままとし、版本として影響力の大きかった「異制庭訓往来」を使うこととする。「兄弟のように似ている」と見える『新撰遊覚往来』にも「新撰」の冠が付けられていることを勘案すると、これらの編述は当時の世に流布していた「消息集」を念頭において作られたと見るべきであろうか。

〔異制庭訓往来の伝本〕

1. 新撰之消息 1冊
天文14年（1545）11月
泗水賛法師 謙堂文庫（山門東塔真如蔵旧蔵）
2. 百舌鳥往来
室町末～江戸初 筑波大学附属図書館蔵
3. 百舌往来（下巻 冷水往来）2巻合冊
寛正2年（1461）11月 陽明文庫蔵
4. 百舌往来（別名 十二月往来）2巻2冊
室町中期写 国会図書館蔵

5. 森月往来 中世 川瀬一馬氏蔵
6. 新撰消息往来 (亦号百舌)
室町時代後期 日実書か 早稲田大学蔵
7. (異制庭訓往来) 1 冊下巻
室町中期写 竜門文庫蔵
8. 異制庭訓往来 1 冊
天和 3 年 (1683) 3 月刊 小河多右衛門板本

上記 8 本の内、「5. 森月往来 (中世, 川瀬一馬博士蔵)」については披見の機会なく, 石川氏の解説 (日本教科書大系) に拠っている。

二 目録と話題一覧

『異制庭訓往来』は, 往返一組の書状を 12 ヶ月に排した, 24 通の手紙からなる往来集である。月毎に中心話題が設定され, その話題を巡って質問 (あるいは依頼) があり, 回答・解説がなされるという形をとる。回答は, 話題を普遍化して何らかの主張を展開する形を取ろうと意図していて, この主張が「目録」として作品の冒頭に掲げられている。ただし, 普遍化に成功したのは前半一部の月に限られるように見える。

目録	イ本号十二月往来
正月	尽戯論之品讃無言之徳
二月	極酒肴之数頭有艶之色
三月	就茶論物之本末
四月	因香正事之邪正
五月	依偷盜略現財物之類
六月	讃武勇頗記兵仗之品
七月	嘆学文又出書籍之類
八月	論筆法仍示諸家之図
九月	因述作尽和漢之体
十月	就管弦露楽器之類
十一月	以仏事尽禅家之礼法点心之様
十二月	就祈祷呈法会莊嚴之体

* 国会図書館蔵本による。現行字体に改め, 訓点を略す。

各月の手紙には, 中心話題に関連した語句集団が

内包されていて, これが消息文の分量の大部分を占める。この語句集団に加えて, 古今東西の故事来歴・前例故実を列挙するのが、『遊覧』にも, また後続の『庭訓』にもない、『異庭』の大きな特色である。このため, 往来の形はしていても, 長文ではあり, 現実に通用する手紙を書く見本としては使いにくい構成・文体になっている。書状の形を学ばせようとする意識は薄く, 主眼は, 百科事典的な内容の学習にある。しかし, あくまで一通の整った手紙文としての整合性を持たせるように文章が工夫されている。

初めに, 何が関心事であり, 学習事項であるのかを確かめるために, 各月に配された中心話題を挙げる。同時に, 『遊覧』と対比することによって, 共通する話題と『異庭』に独自の関心事とを区別する。* 印は, 『遊覧』に取上げられていない, 『異庭』に独自の話題である (表 I 参照)。独自話題は『異庭』の特色をよく表すが, これについては別稿に譲る。

【表 I】 (話題と所収語句群)

『異庭』	『遊覧』
1月 遊宴・諸道 (六種の会 / 戯論の遊)	6月 遊技・遊戯
2月 * 《酒宴・料理》
3月 喫茶 (歴史 / 産地 / 茶銘)	4月 産地・銘柄・種類
4月 香道 (出来方 / 伝来 / 銘)	7月 名香銘
5月 * 《財物・珍宝》
6月 * 《兵法・武具》
7月 学問 (外典書名)	11月 外典書名
8月 習字 (東西書家の法 / 小陽殿八曲)	8月 筆法の諸形図
9月 詩・聯句・和歌・連歌	9月 少陽殿八曲
	1月 連歌 (家作りの材 / 作文体 / 聯句 / 連歌新式)
	2月 和歌 (八代集 / 三代集)
10月 管弦 (五音)	10月 管弦の徳
11月 仏事 (七山名利 / 諸役名 / 堂舎名 / 作法礼式 / 飾の具足 / 点心 / 茶子 / 菓子)	11月 仏事 (七山 / 諸役 / 堂舎名 / 点心 / 茶の子 / 菓子)
12月 仏事 (室礼 / 仏具)	3月 十服茶 (室礼 / 喫茶の具足)
	12月 仏事 (莊嚴 / 具足 /)

これらの話題はどのような基準で選ばれたのであろうか。私は, 『遊覧』の話題選択について, 「抑も,

詩歌、管絃、茶、香、連歌は、世上の風体爲り」（11月往状）・蹴鞠、管弦、楊弓、小弓は世上の風体也。」（6月往状）を挙げて、これらが当時、世間に流布する一般教養であったと規定した（拙著『寺院文化圏と古往来の研究』笠間書院）。『異庭』においては、この『遊覚』の話題と語句集団を取り込みつつ、これに故実を加えて膨らませる一方、複数状の話題を一通に纏めることによって、一通に収める情報を増大させている。その結果、『異庭』の一通は『遊覚』をはるかに上回る分量となり、また、新しく3ヶ月の空白を生み出したので、ここに従来の一般教養にはなかった新しい話題を盛り込むことができたものとする。新しい話題は『異庭』の文化圏が武家社会に近いことを示している。

三 『遊覚往来』との重なり

次に、収められた語句集団を共通項目ごとに対照し、語句群の異同と相互関係の詳細を見ることにした。紙数の関係で、仏事を話題とする11月と12月を例に取る。

（一）11月状の構成

往状は四恩報謝の仏事を経営するに当たり、茶の具足の借用を依頼し、点心の式の委細を問うもの。返状は、依頼に応じて具足を進上し、点心について説いたものである。書状の全体を見通すために、これを図解し〔表Ⅱ〕とする。左段には一通の内容構成と収められた語句集団の区分とを示した。右段には、これらに重なる『遊覚往来』の語句集団を対応させた。『遊覚往来』の5月と3月の全語群が、『異庭』11月に内包されている。

〔表Ⅱ〕

異制庭訓 11月	新撰遊覚 5月／3月
冒頭挨拶	冒頭挨拶
夫レ三有ノ牢獄ヲ出テ欲スハ先ヅ 以テ四恩之高徳ヲ報ズ可キ也。	抑、四恩報謝ノ小仏事ヲ行フ。
A群 寺院名	○ 7

B群 役職名	○	5月往状
C群 堂舎名	○	
D群D 諸作法	×	
D' 諸礼	×	
D'' 年紀等ノ礼	×	
E群 飾具足		
a群 画軸	○	3月往状・返状
b群 家具・調度品	○	
c群 喫茶ノ具足	○	
d群	○	
e群	○	
F群 点心ノ心得		
a群 点心	○	5月返状
b群 茶ノ子	○	
c群 菓子	○	

（二）語群提示の枠組み

次に、これらの語群が、内容を持った一通の手紙のなかにどのように組み入れられているのか、語群提示の枠組みの作り方を見ていきたい。

A群とB群については、『遊覚』と『異庭』の間に差はない。両者ともに、「A群のB群(××寺等の長老・首座・・)」という形を取る。

『異庭』に工夫が見られるのはC群の場合である。『遊覚』を基にして言葉を補い、語群を増補しつつも、文意の通る形に文章を組み立てていく様が見えるので、やや詳細に後半部の記述を追うことにする。太字は両者に共通する表現である。

〔遊覚5月往状〕

又、(C群12語)之掃除ノ次第、一向無叢林之間、無沙汰候。

此ノ外、(C'群5語)之僧、号相伴・相看、多付旦過來集。

兼又、点心様、委注承候者、可為恐悦候。

心事期参拝。

不宣謹言

[異庭 11 月往状]

某一向無叢林之間、臆次之体不弁候。(C 群 19 語)
之振舞、

D 相看・相伴・請加寮・病暇・参暇等之作法、

D' 上堂・小参・秉弘・普説・念誦・巡堂・茶湯之礼、

D'' 元正・除夜・上巳・端午・七夕・重陽・結
夏・解夏・盂蘭盆・冬至・臘八・仏誕生・仏涅槃・
達磨忌・開山忌、及、初一月半等之礼数、

全分雖不存知、於下品之席、僧衆召請可令申候
之处、山家之式、無沙汰之体也。

本尊・脇絵・卓一脚・並ニ茶具可預芳借候。

又、点心之式、更ニ迷惑仕候。委細可承候。

将又、仏事之体者、可為建長寺天峯和尚ノ陞座・
天竜寺宝物和尚ノ拈香候。

其日者、可有御聴聞候。

恐々謹言

『遊覧』の「掃除次第」は、『異庭』において D・D'・D'' の語群を包括する諸々の作法・礼式を提示する手紙に変わる。そうした山家の式に疎い自分が僧衆を招請してこの四恩報謝の仏事を務めることになった。ついては、茶具の借用と点心の式についての教示をお願いしたいと文面は続く。「本尊・脇絵・卓一脚・並ニ茶具可預芳借候」の一行をここに加えることによって、『異庭』の返状は進上する飾の具足・茶具に関わる語句群を記すことになる。『異庭』が、『遊覧』の 3 月状をも組み込むための工夫であると考え。

『異庭』の返状は、往状の依頼に応じて、(E) 飾りの具足と (F) 点心の式に関わる語群を提示する。仏事に茶の湯が不可欠であったことから、『遊覧』に於いては、仏事における茶の作法を主題にした 5 月と、十服茶の茶会を主題にする 3 月とにまたがっていた喫茶関係語句を 1 通の中に収めるのである。習字を話題にした 8 月(『遊覧』8 月・9 月に相当)や、詩・和歌・連歌を話題にした 9 月(『遊覧』1 月・2 月に相当)も同様である。

(三) 語句の増補

ここでは、語群別に、語句の出入りを比較する。『異庭』が、『遊覧』所収語群を含みこみながら増補されつつ作成されたという仮説を証明したい。

(A) 寺名

『遊覧(5 月)』には「七山」と称される次の 7 つの寺名が挙がっていた。

①建長寺

②円覚寺

③寿福寺

④建仁寺

⑤東福寺

⑥禅林寺(南禅寺)

⑦浄智寺

『異庭』ではこの 7 寺院を含みつつ、「五山十刹」と名づけて増補がなされている。ところが、国会図書館蔵本のみは「五山十刹」の語を用いず、

七山之内、建長寺、円覚寺、寿福寺、建仁寺、東福寺〈以上五山〉、加南禅寺、浄智寺〈以上七山〉。名利者、禅興寺、大慶寺、浄妙寺、万寿寺、東勝寺、善福寺等

の 13 寺を挙げるのである。他の諸本は全て、これに天竜寺(暦応 4 年 1341 改称)を加えている。私見では、国会本が古態を残していると考えているのであるが、ここに、『遊覧』と同じく「七山」を規定していること、その後に「名利」が増補されていることに注目したい。『遊覧』の語群が取り込まれ、増補されて、国会本の如き本文を持つ『異庭』が作成され、やがて、他本にある「五山十刹」の形に定着する過程を留めると見るのが穏当ではあるまいか。

(B) 役職名

[表 II] から明らかなように、A 寺名・B 役職名・C 堂舎名の 3 語群が『遊覧』の 5 月往状を成していた。『異庭』B 群においても、A 群と同じ増補の状況が見られる。『遊覧』(謙堂文庫本)は役職名 19 を収めていたが、『異庭』にあっては 41 を数える。

次に、『遊覧』の 19 語に通し番号(①~⑱)を付し、同じ語句が『異庭』にある場合は同じ番号で示したものを挙げた。*印は『異庭』に新出の語句である。両者を比較すると、

1、掲出順位に大きな異同がない。

2、『異庭』では同じ役職を細分化している(同じ番号が重出する)。

特に、⑤侍者については、前半に5種の侍者を挙げ、さらに後半に2種の侍者を加えている。

- 3、『異庭』では頭首方と知事方とに2分している。
 4、⑮から⑲は寺内の役職ではなく寺に寄宿している諸々の人々であるため、『異庭』ではそれらを網羅する増補（＊印）がなされたと見られる。
 5、因みに、『庭訓往来』（東洋文庫）では10月に大齋の話題があり、寺家の諸役、僧位僧官の名称についての語群が収められている。役職名を、「禅家者」「律僧者」「聖道者」の3者に分けて記すので、『遊覚』『異庭』のそれは禅家のものであることが分かる。
 6、『庭訓往来』には更なる補充があり、50項目を数える。『遊覚』になくて『異庭』にある「都聞」「都官（管）」「浴主」を含み、『異庭』と同じく5種の侍者をあげる。

〔遊覚 5月B群〕

- ①長老 ②首座 ③書記 ④蔵主 ⑤寺者
 ⑥都寺 ⑦監寺 ⑧副寺
 ⑨典座 ⑩維那 ⑪直歳 ⑫浄頭 ⑬殿主
 ⑭堂主 ⑮知客 ⑯沙彌 ⑰喝食 ⑱行者
 ⑲人具

〔異庭 11月B群〕

- ① ②前堂 ②後堂 ③ ④（東）蔵司
 ④西藏司 ⑩ ⑮ ⑤焼香 ⑤書状
 ⑤請暇（客） ⑤湯薬 ⑤衣鉢 以上頭首方也
 ＊提点 ＊都聞 ＊都官 ⑥都寺 ⑦
 ⑧（上）副寺 ⑧下副寺 ⑨ ⑪ ⑬ ＊浴主
 ⑫ ⑭ 以上知事方也
 ⑤聖僧 ⑤御影 ＊大耆旧 ＊蒙堂 ＊前司
 ＊門徒 ＊法眷 ＊尊宿
 ⑯ ⑰ ⑱ ⑲

（C）堂舎名

寺院の堂舎名は『遊覚』に12があがり、内2（④⑩）が『異庭』にない。『異庭』には19（謙堂文庫本は17）の堂舎名が記されるので、9語が増補されたことになる。〔表Ⅲ〕はこれを対照させたものである。

〔表Ⅲ〕

遊覚	異庭国会本	異庭謙堂本
①仏殿	⑥	⑥
②僧堂	①	①
③法堂	土地堂	○
④照堂×	祖師堂	○
⑤塔頭	③	③
⑥山門	×	衆寮
⑦方丈	昇堂	○
⑧廊下	⑤	⑤
⑨庫裏	卯堂	○
⑩眠蔵×	⑨	⑨
⑪東司	②	②
⑫後架	⑪	⑪
	⑫	⑫
	⑦	⑦
	寮舎	○
	浴舎	○
	塔婆	×
	輪蔵	×
	鐘楼	×
	⑧	⑧

（E）飾の具足

『異庭』の11月返状は、四恩報謝について詳細に解説した後、「飾の具足等少々、進ぜ令め候」として、仏事に必要な書画の軸、茶碗や香炉、家具や敷物の類を挙げている。これは、『遊覚』3月の中心話題「十服茶之勝負」のために準備された室礼と茶道具に重なっている。

全てを掲げるのは煩瑣に過ぎるので、『異庭』の冒頭2群を挙げ、『遊覚』に重なるものを太字で示してみよう。本文では、この後に、焼香の具、花瓶・花台、燭台、茶器・茶道具の諸々が列挙される。

〔異庭 11月返状 飾の具足〕

a群

- ①思教之釈迦三尊 四睡図 三笑画 ②秦夷弥陀三尊 十王図 三教図 ③牧溪達磨 ④青黄牛 ⑤郁山主布袋 寒山十得 ⑥月湖之観音 漁監 馬郎婦 朝陽封月 猪頭蜆子 ⑦韓幹馬 ⑧載嵩牛 花鳥草木図 竜虎山水画 ⑨八幅一

対 瀟湘八景 ⑩松源 無準 痴絶 虚堂等賛
也 ⑪各象牙紫檀軸・梅花緞子表背也

b 群

①花梨木卓 ②紫檀香台 ③白鑑胡床 ④靠椅
⑤黒漆曲祿 ⑥蘇枋椅子
⑦金欄白氈之打敷 ⑧縹縹金紗之水引 ⑨豹虎
敷皮 ⑩毛氈並茵簟

c 群～(後掲)

『遊覚 (3 月)』では次のようにある。a から e の小
分類毎に、所収語句に通し番号を付し、『異庭』と重
なるものを太字とした。

「a 画軸之部 b 家具調度品 c 壺瓢之部 d 焼香
之具足」が往状にあり、「e 喫茶之具足」が返状に収
められる。

a 画軸之部

①思教之釈迦三尊 猪頭蜺子 龍虎 梅竹 ②
木桂之達磨 ③青黄牛 ④郁山主河鵬 石 (鶴)
鶴 ⑤月湖之観音 漁監 馬郎婦 栗鼠 花鳥
⑥堪殿主之布袋 寒山十得 朝陽封月
⑦八幅一対之瀟湘夜雨 洞庭秋月 山市晴嵐
漁村夕照 江天暮雪 遠寺晚鐘 遠浦帰帆 平
沙落雁 ⑧半出達磨 出山之釈迦 遊行羅漢
遊山仙人 野馬 虎狩 芦雁 鷺鷹
⑨象牙之軸・梅花緞子表背

b 家具調度品

①紫檀卓 ②紫檀机 ③花輪木椅子 ④弧床
⑤曲祿 ⑥文卓 ⑦豹虎之敷皮氈 ⑧白氈
⑨金欄呉綾之打敷

c 壺瓢之部

①饒州 ②定州 ③鎖乳 ④油滴 ⑤水滴
⑥大海作 ⑦鶴頭 ⑧円壺 ⑨瓶子成 ⑩肩築
⑪平壺 ⑫茄子成

d 焼香之具足

①茶垵之香炉 ②胡銅之花瓶 ③鎰石之香筋
(匙) ④火匙 (箸) ⑤赤銅之台 ⑥白錫之蠟
燭台 ⑦雲母之銀盤

e 喫茶之具足

①唐石之磨碓 ②黒漆茶篩 ③耳白鐘子 ④同
奈良風炉 ⑤紫竹茶筴 ⑥黄楊茶瓢 ⑦象牙茶

杓 ⑧茶垵 ⑨搗茶 ⑩襦茶巾 ⑪梅払壺
⑫唐竹茶杓 ⑬天目建盞三対 梨花・金糸・青漆
之台 ⑭円椀 六入之茶盤 ⑮銅湯瓶 ⑯鉛水
瓶 ⑰鐵手取 ⑱朱漆木椀 ⑲椀子 ⑳櫟 皆
具, ㉑金糸花・銀糸花・九連糸・犀皮・堆紅・堆朱・
堆漆・鶏揚・桂漆・雲世良田等香箱

両者を比較した結果、全体として大きな差は認め
られなかった。

a 群について、『異庭』では思教の次に「秦衷」をおく。
彼が思教や牧溪に並ぶ画家なのかは不明。「⑤郁山主
布袋 寒山十得」は、『遊覚』の「④郁山主河鵬 石
(鶴) 鶴」と「⑥堪殿主之布袋 寒山十得」とが目移
りによって結びついた可能性がある。『遊覚』で一幅
ずつ紹介されていた瀟湘八景は、「⑨八幅一対 瀟湘
八景」と一括されている。

b 群には、机、椅子、敷物があるが、素材の部分
と製品の部分とがずれることが多く、たとえば『異庭』
の「①花梨木卓」・「②紫檀香台」は、『遊覚』に「①
紫檀卓」・「③花輪木椅子」のようにある。また、『異庭』
では椅子類に④靠椅を加え、③白鑑・⑤黒漆・⑥蘇
枋の別をあげている。

『異庭』の c・d・e 群における語群提示の形を単
純化して示すと、次のような列挙方式になっている。

ア) (茶碗・香炉・花瓶・香匙・火箸) 瑠璃水晶の
台に立つ。

イ) (燭台・燭煎各五対, 金糸・銀糸・九練糸・堆朱・
堆紅・堆漆・沈金・犀皮・桂*等/香合) 是を簞
笥二対に入る。

ウ) (建盞・天目・饒州・定州椀・油滴等) 各々金
糸輪花台に在り。

エ) (土器・盆十対, 茶巾・茶筴・茶瓢・壺) 犀皮
盆に置く。

オ) (円壺・平壺・鶴首・肩築) 尽く金糸の盆に在り。

カ) (茶磨・鐘子・銅瓶・手取 火炉・風炉) 之を
進り候。

キ) (椀・厨子・櫟・折敷・湯瓶・湯盞・茶匙・飯櫃・
再進鉢・水桶・茶杓等) 之を進り候。

アの冒頭に「茶碗」があり、これが『遊覚』の c 群に、
残りの「香炉」以下が d 群に相当する。

新撰遊覺	異庭（括弧内謙堂文庫本異文）
①麩差物	①麩指物
②零余子	②零余子指
③串柿	⑦
④笋干	④油煎笋干（油炙笋干）
×⑤生栗	⑤干栗
⑥干松茸	⑥
⑦豆腐上物	⑫
×⑧油煎伽陀布	⑨泥和布（和布）
⑨和布	⑪
×⑩青苔	×乱糸
⑪出雲苔	×对金（万金）
⑫炙昆布	×唐肋豆（唐納豆）
×⑬紫苔	⑬
×⑭菊池苔	×曳干（引干）
×⑮大豆	×干蘿蔔
⑯牛房	×胡桃
×⑰削物	③
	×干棗
17 点	18 点

所収点数には大差がないが、語の出入りが多い。海苔類の内、『異庭』に収めるのは⑫出雲苔のみ。⑪青苔⑭紫苔⑮菊池苔は『遊覧』独自である。⑤生栗は『異庭』ではC菓子部の部にあり、ここには干栗を入れる。茶の子は、乾物を始めとする加工品が主流を占めるので、干栗が相応しいように思われる。

一方の『異庭』にのみ収められている「乱糸・万金」の正体は不明。「胡桃」は、『遊覧』では「C菓子」に数えられている。

〈c 菓子〉

菓子はくだものである。『遊覧』に 15 点を収め、この内の 2 点 (⑤梅と⑦杏) のみ『異庭』と重なる。『異庭』には荔枝・龍眼を始め瓜類 4 点など合計 13 点の品名を収め、水茄子や苡菱も菓子に加えている。重なる語が 2 点と少ない理由は、『異庭』には 12 月に東山会の負態 (酒宴) の話題があり、ここに果物が多く挙がるためである。語順が『遊覧』に等しく (表 VI 参照)、これを吸収したと見ることができる。

[表 VI] (c 菓子)

遊覧往来	異庭 11 月	異庭 2 月 (酒宴)
①柑子	×荔枝	①
②橘	×龍眼	②温州橘
③椎	×生栗	
④柘榴	×唐瓜	④
⑤梅	×大和瓜	
⑥枇杷	×白瓜	⑥
⑦杏	×胡瓜	⑦
⑧串柿	⑦	⑧
⑨林檎	⑤	⑨
⑩楊梅	×桃	⑩
⑪檨杣	×李	
⑫梨	×水茄子 (水茄)	
⑬胡桃	×苡菱	⑭
⑭栢実		⑮
⑮干栗		
15 点	13 点	10 点

『異庭』では菓子として「荔枝・龍眼・生栗」の 3 点を挙げた後、「夏者、～等也」と続ける。まず、仏事が催される 11 月に合わせた品を挙げ、もし、夏に催されるなら唐瓜以下のものになると付け加える形をとったのである。単純な語群列挙に終わることなく、手紙文としての工夫の跡を見せている。

(四) 12 月往状の制作

『異庭』には仏事を主題とする手紙がもう 1 組、12 月に排されている。『遊覧』でも同じ 12 月に同じく大法会 (大法事) を構えることを想定した手紙が収めてある。珍しく、『遊覧』の方が遙かに長文である。

前項 (11 月状) と同様にして語群の対応関係を調査した結果、『異庭』の往状は『遊覧』の往状の大部分と返状の一部、それに僅かな独自本文を加えた形から成り立っていることが判明した。単純化して示すと次の通りである。

[表 VII] (12 月往状の構成)

遊覧 12 月往状 / 返状	異庭 12 月往状
広大/法事7構7。 a 群 庭前・堂内荘嚴 ①宝樹 / 宝幢 ②綵幡 / 綵縵 ③仏壇 / 花机 ④螺鈿之金物 ・(略) ⑩高座礼盤 ⑪前机磨乱貝 ⑫時絵 ⑬縹縹縁半畳 ⑭高麗縁畳 a → b 群 仏具 ①六輪錫杖 ②水牛如意 ③鑰石香呂 b 前半 → ④唐様鷲尾 ・(略) ①散華籠 b 後半 ×	大法会7構7。 a 群 家具 / 調度品 ○ × ○ × × ○ ○ ○ ○ ○ b 群 仏具 (b'+b 前半) ①錫杖 ②如意 ③香炉 皆指減金仏具也。 × × ×

<p>c 群 請僧出仕之体</p> <p>①唐綾法服</p> <p>②錦袈裟</p> <p>・(略)</p> <p>⑨浮泉綾表袴</p> <p>⑩練貫襪</p> <p>⑪黒漆鼻高</p> <p>⑫錦草鞋</p> <p>⑬楊班之袈裟</p> <p>⑭承仕者浄衣</p> <p>⑮中童子者狩衣</p> <p>⑯大童子者如木水干</p> <p>⑰中間男共者直垂</p>	c →	<p>c 群 請僧他/装束</p> <p>②唐錦袈裟</p> <p>①唐綾法服</p> <p>×</p> <p>⑨浮線綾指貫</p> <p>⑩練貫襪子</p> <p>×</p> <p>⑫錦草鞋</p> <p>× 各新調美麗也。</p> <p>⑭承仕者浄衣</p> <p>⑮中童子者狩衣</p> <p>⑯大童子者水旱</p> <p>⑰中間男者直垂</p>
<p>d 群</p> <p>①大曼荼羅供</p> <p>②寅一点乱声</p> <p>③辰時之集会</p> <p>④難波奈良伶人舞人</p> <p>⑤高麗新羅之曲</p> <p>⑥堂内之莊嚴</p> <p>・(略)</p> <p>⑭聴聞之道俗</p> <p>⑮集会之貴賤</p> <p>⑯門前成市</p> <p>⑰堂上如花</p> <p>⑱皆是峙耳驚目</p>		<p>d 群</p> <p>①次七日者大曼陀羅供</p> <p>②</p> <p>③</p> <p>④</p> <p>×</p> <p>×</p> <p>×</p> <p>⑭</p> <p>⑮</p> <p>×</p> <p>×</p> <p>⑱莫不峙耳驚目</p>
<p>《返状 b'》</p> <p>ア鈴杵</p> <p>イ五胡</p> <p>ウ三古</p> <p>エ独古</p> <p>オ金剛盤</p> <p>カ瀧水</p> <p>キ塗香</p> <p>ク花瓶</p> <p>ケ火舎</p> <p>コ輪宝</p> <p>サ羯磨檪</p> <p>皆滅金ヲ指シテ仏具也。</p>	b' →	<p>ア鈴</p> <p>エ独古</p> <p>ウ三古</p> <p>イ五胡</p> <p>オ金剛盤</p> <p>カ瀧水</p> <p>キ塗香</p> <p>× 關伽器</p> <p>ク花瓶</p> <p>× 燈台</p> <p>ケ火舎</p> <p>コ輪宝</p> <p>サ羯磨檪</p>

さて、語句群は全て往状に吸収され、返状にはない。返状は、『異庭』のもう一つの特色、故実・史実の類を知らしめることに力を注いで作られているように見える。

12月返状には、歴史上、著名な人物が頻出する。彼らは、記主の理論を強化するための例示となる形で提示される。即ち、

(1) 夫レ、君恩ヲ受ケ、国ノ徳ヲ思ハ(者)、誠ニ賢臣良子ノ所存ヲ(也)。

と主張して後、次のように続けるのである。

昔、周公(之)成王ヲ助ケ、

伊尹ノ(之)太甲ヲ訓ヘ、

子房ノ漢高ヲ教ヘ

魏徴ノ太宗ヲ輔ケ。

皆是斯クノ如シ。

殷、漢時代の名臣を列举して説得する。あるいは、

(2) 夫レ、国家ヲ治メ、爵禄ヲ保ツト、三宝ノ加被ニ(於)依ラ不トイフト莫キ也。

大唐ノ肅宗皇帝、土蕃ノ(之)梟賊ヲ払ハガ 為ニ...

本朝ノ斑鳩ノ王子、守屋ノ虐臣ヲ誅セガ 為ニ...

のように、彼是の典型例を対比させる。こうした形をいくつか繰り返すことで、主張を徹底させ、その主張を実践した歴史(国名・人名等)を知らしめることができる仕組みである。

おわりに

本稿では、仏事を話題とする11月12月の手紙を例として、『異制庭訓往来』の本文制作の特徴を、『新撰遊覚往来』との関連を中心に解明した。『遊覚』のもつ語句群を縦横に選び取りつつ、独特の理論を展開する方法が見えてきたと考える。12月返状に見た故実を列举する文章については、稿を改めて詳しく述べる予定である。

付記

(1) 本稿は、平成14-16年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(2) 稿をなすに先立ち、語句群の諸本対校表を作成した。『異制庭訓往来』諸本対校については、本学卒業生の三原弓枝さんの力を借りた。記して御礼申し上げる。

(平成16年10月29日受理)